

人間とその環境



松山義則
総長

ご卒業おめでとうございます。

同志社大学、同志社女子大学での学生生活を終えられ、いまそれぞれの道に進まれるときを迎え、激しい時代、酷しい社会に立ちむかわれることとなりました。ご苦労多いことと思います。

学生時代には京都の地になりましたが、この地での四季のうつりかわりをも何度か経験されました。京都の雰囲気や文化、歴史、自然や生活を身近なものとしたと思います。同志社の卒業生に会いますと、在学の際の大学と京都をなつかしく想起され、そこでの体験や人びととの邂逅について思いをこめて話さ

れます。青年時代をすごされた環境は言うまでもなく大切な影響を人びとに与えます。人間は環境のなかで生き、育っています。けれども環境は人の外からその人に影響を与えるだけでなく、その人の独自の個性と深いかわりをもつものでもあります。

ドイツの黒い森にライン河やドナウ河の源流であるコンスタンツ（ボーデン）とよぶ湖があり、そのコンスタンツ村に古くからの言い伝えがあります。ある厳冬の深夜のこと、一人の騎士が馬を駆せています。白雪に厚く覆われた湖畔の道を目ざす旅館に向っていました。やっとのことで到着しました。旅館の主人は疲れはてた彼を暖かく迎え入れ、そしてどの道を行ってきたかと尋ねました。騎士は振りかえって、自分の走ってきた道を指し示しました。主人は雪のなかにつけられた駆けてきた道の跡をみて驚き、その雪の道は湖水の真只中であり、万一、氷が破れたら、愛馬もろとも深い湖底に沈んだであろうと言いました。騎士はあまりのことに恐れ、うち震えたといえます。

この物語は古くからの村の伝説でありましたが、コフカという学者は環境論を展開するためにこれを引用して、環境には客観的な地理的環境と、その人にとっての主観的な行動的環境とがあり、これをわけて考えることができると述べています。その騎士が湖畔の道であると思いきんで走っていた白雪の積る道は、彼の主観的な行動的環境でありました。客観的な地理的環境は旅館の主人の知っていた別の道にありました。地理的環境と行動的環境とが重なり合うことも多くありますが、環境は人間にとってはすべて行動的環境であります。環境は人間にとって暖かく魅力あるものであることもあります。このように自分とは異質な障害であり抵抗であり苦痛をひきおこすものでもあります。このような環境の特性は、環境のなかに生きている人によって色づけられ価値づけられ、希望の対象としてあるいは不安の対象として位置づけられます。仕事がよく行かないとき、心身が疲れたとき、環境をかえてみることに、転職すること、いわゆる

転地療法といわれるものもあります。これが成功することもあります。効果がみないこともあります。外的環境を変えてみたところで主観が色づける仕方が変らないかぎり、環境の意味に変化を生じないことでしょう。ヤドカリが自分の身体の上に貝殻を背おって歩いて行くように、自分の環境の色づけは変わることがありません。環境と自分との関連は深いかわりをもつのです。

だからといって外的環境はつねに主観によって支配しつくされているものではなくありません。われわれの生涯で直面する問題には、その克服と処理をきわめて困難にする場合に遭遇します。人間は競争社会のなかで競生して共生しています。知恵の木の実を食したといわれる人間は他者に勝利するためには苛酷下劣な手段をもとるようになります。理想や思想そして宗教さえも自己の保存と他者の壊滅のために、利用することは世界の歴史の教えるところでもあります。強引な自信をもって他人を押しつけて勝者の道を進む人もあれば、屈辱のなかで敗者の道を踏む人もありました。職場でとりのこされること、同僚や後輩に追いぬかされることもありましょう。この人生の波乱のなかでわれわれは耐えねばなりません。けれども陽の照るときが来ることを願って待ちたいと思います。「禍福はあざなえる縄のごとし」と言います。長い人生にはわれわれの能力や予想を超えた状況が生じるものです。

同志社の創立者新島襄先生は明治十八年、ボストンからノースフィールドで働く同志社の卒業生蔵原惟郭氏への書のなかで「人生百事意の如くならず、成業ひとえに忍と勉とによる」としたためています。人生はすべて思うようにはならないものです。業の成るはただ忍と勉とによるのですと語り、さらに加えて「労働は人生の良薬なり、苦難は青年の業を成すの階梯なり、愛兄よ忍ぶべし忍ぶべし」と激励されています。また「浮沈得失は天意に任ず」と語りました。先生は純粹に信仰に生きる人でありました。すべてを天意にまかせて自らの道を歩きましたが、われわれはその心を学びたいと思います。環境のもつ厳しさに直面しこれに

耐えたいと思いますが、人間は弱く絶望に落ち入るときもあります。しかしわれわれが真実を仰いで生きる
とき、それを支える人びと、助ける人びとが生れます。サポーターの力づよい声援は心身の限界に挑戦して
孤独のなかに走るランナーに不思議な活力を生みます。苦悩にある人びとに対する隣人のソーシャルサポー
トは大きな支えと勇気となります。そして最大の援助は神の無限の支えなのです。

先年、コンスタンツ大学を訪問する機会があり、五十年あまり以前に知ったコンスタンツ湖を見ることが
できました。古城の丘からみる薄暮のなかに横たわる大きく静かな湖が白銀の厳冬の夜を想像させてくれま
した。人間はそれぞれかけがえない大切な自分の生命を生きています。しかもこれは有限ないのちです。
人間は争いや戦いから逃れることができない宿命を背おっています。己れ高しとし、他を低劣とみるおろか
しさをもっています。地理的環境のもつ厳しさを回避することはできず、その苛酷さの中で歩まねばなりま
せん。しかも地理的環境は自己の世界で読みとられ色づけられてもいます。主観を通してしか見ることで
きない環境知も人間の宿命のようです。卒業生のみなさんが一人ひとり大事な生涯を歩めます。どのよう
な環境につつまれるかは予想できても確定することはできません。努力をかさね忍耐をもってことにあたり、
勇気をおこして進みたいと思います。新島先生はまた「吾人同志の者は、真理は最後の戦勝者たるを信じ、
互いに相助け、相励まし、着実に、穩当に、堅確に、余念なく吾人の志す所のものを実行し」と語られてい
ます。これからの一日一日のいのちを着実に穩当に堅確に余念なく励み生きたいと思っています。

神の守りが豊かにみなさん一人ひとりの上にありますよう健康と幸福を祈ります。

卒業生に
贈る
言葉

草は春風に礼を言わず
落葉は秋風に不平を言わず



八田 英二
大学長

この春、同志社大学での学業を修了され、晴れて学士の学位、あるいは修士、博士の学位を授与された皆様に、同志社大学長として心からお祝い申し上げます。これまでの皆様の長年の勉学努力、研究活動に対して深く敬意を表します。またこの間、皆様を温かく支え、見守ってこられた関係者の方々にも衷心よりお慶び申し上げます。社会に船出される卒業生や修了生の皆様に、同志社大学長として一言贈りたいと思います。皆様が学ばれた同志社大学は、今出川キャンパス、田辺キャンパスの二つのキャンパスに六学部、八研究科を擁し、二四、〇〇〇名弱の学生が日夜勉学に励んでいます。わが国屈指の総合大学ですが、前身は同志社

英学校です。米国から帰朝された新島襄先生が同志社英学校を創立されたのは明治八年十一月二十九日でした。時は、維新後の開国で世情は混乱の極みにありました。近代国家の建設にあたり、一国の将来は一握りのエリートではなく、まさしくその国を構成する人民のもつ知識・素養にかかっていた。このような教育のもつ重要性に鑑み、新島先生は「良心を手腕に運用する人民」の養成を目指して、ここ京都の地に新たな教育事業を興されました。新島先生の信念は「良心ノ全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」という良心碑に込められています。両キャンパスに立てられた良心碑は同志社教育の原点となっています。

わずか八名の生徒からなる同志社英学校は新島先生の自宅での祈祷会をもって始まりました。新島先生の祈りは、清教徒がアメリカの草原で祈った祈祷にも似て、力強く人々の心にしみるものでした。新島先生の良き理解者であり協力者であった宣教師のデイヴィス氏は「あの朝新島が捧げたまじめな、やさしい、涙にみちた祈りの言葉を私は決して忘れることはできない」と書き残しています。祈りから始まった新島先生の教育事業は同志社大学に受け継がれてまいりました。同志社大学は自由主義、キリスト教主義、国際主義を教育理念の基礎にしています。建学の精神のもと、これまでに同志社大学は幾多の有為な人物を社会に輩出してきました。同志社大学の名はわが国教育界のなかでも屈指の存在として輝かしい歴史とともに語られてきました。西暦二〇〇〇年には、同志社は記念すべき百二十五周年を迎えようとしています。

数年前の春、皆様が同志社大学、あるいは大学院に入学された折のことを思い出して下さい。その入学式で、「同志社大学設立の旨意」の朗読をすることにより、教職員一同は同志社大学の教育理念に従いつつ、教育指導に専念することを宣言いたしました。今年もまた、卒業生や修了生の数だけの、自ら立ち自ら治むるの精神を備えた人物、いわゆる自治自立の人民の養成を成し遂げることができました。教育事業の成果ともいふべき卒業生や修了生を送り出すことは、私たち教職員一同のこのうえのない誇りとするところです。こ

れはまた、教育事業に携わる者だけが経験できる至高の喜びです。

世紀末を目前に、時代は混沌としております。過去の延長線上に将来を描けるという従来の手法が通用するとは到底考えられません。時はまさに不確定性の時代、変革の時代です。この時代に求められているのは、国の将来を憂い、自由で広大な精神を持つ人物です。高く理想を掲げ、主体的に問題解決にあたる創造力溢れる人物の育成は、新島先生が看破されたように、ひとえに同志社大学の目的とするところです。皆様が同志社大学で身につけられた学術技芸の知識、ここで涵養された独立独行の精神を発揮され、二十一世紀の社会を率先して切り開かれることを心から願っています。わが国の将来は、皆様の双肩に託されているといっても過言ではありません。

かつて、明治から大正にかけて活躍した人物のなかに、竹越与三郎という名の人物がおりました。彼は明治元年に埼玉県で生まれました。慶應義塾大学で学んだ後に、当時の「国民新聞」「時事新聞」で記者として腕ふるい、また政治家として政友会に所属し、代議士にも五回当選しました。のちには貴族院議員、枢密院顧問も歴任しました。新島先生は「基督教新聞」の主筆も務めた彼に、つぎのような書簡を送っておられます。「男児一戦して敗るるも已む勿れ、再戦して已む勿れ、三戦して已む勿れ、刀折れ矢尽きて已む勿れ、骨摧け血尽きて已むべきのみ。真理の為に擲つにあらずんば吾人の生命もまた無用ならずや」というものです。真理のために闘うのでなければ、われわれの命は無用ではないか、という強い決意が先生の体内では荒れ狂う海のように渦巻いていました。しかし、それが外側に流れ出る時には、一転して柔和な行動として静かにやわらいで流れ出たのです。

この優しさと激しさの融合の秘密はどこにあったかと申しますと、先生の天に対する強い信頼にありました。先生は「一切を神に委ねられました。先生の詩に「草は春風に礼を言わず。落葉は秋風に不平を言わず」

という一節があります。先生は一切を自然の成り行きにまかせたと竹越氏は感銘を受け、新島先生の生き方を高く評価しております。

これから社会に船出される皆様方の将来を想う時、私は、このような新島先生の力強い決意と穏やかな姿勢が真つ先に念頭に浮かんできます。皆様方には、同志社大学卒業生として、生涯を通じて「学ぶ心」と「新島精神」を見失わず、弛まず自己研鑽に励まれることを願っています。

最後に一人ひとりの行く末に大いなる期待を寄せて、贈る言葉とさせていただきます。

卒業生に
贈る
言葉

喜びも悲しみも宝石 に変えて



大橋寿美子
女子大学長

大学の四年間、あるいは二年間を同志社女子大学で学んで、今日、卒業の日を迎えられた皆様、また、さらに、大学院で研究を深められた方々に、心からのお喜びと励ましの言葉を贈りたいと思います。また、幼い時からずっと成長を見守ってこられたご家族の皆様に対しても、心からのお祝いを申し上げます。このように知性あふれ、美しく、女性として豊かに成長されたお子様の姿に、感慨深い思いを抱いておられることと存じます。

ところで、今年的生活科学部の卒業式には、例年にない方々に参加していただいたことをご紹介します。

これらの方々は、この女子大学の前身である同志社女子専門学校の学業を、第二次世界大戦の終わる一九四五年に修了されました。戦争が激しくなるにつれ、三月の卒業式が前年の九月に繰り上げられ、ついにこの一九四五年には卒業式さえまともに行われぬまま、学園を離れられたのです。その時の学生だった方々から、戦争の混乱の中で幻となった卒業式の喜びを是非、という声が多く寄せられ、今日、同席されることになったものです。大変な苦難の時期にエリート的女性として学業を修められましたことを讃えるとともに、さらに、戦後の五十年余を同志社人として立派に生きてこられたことに拍手を贈りたいと思います。

さて、新たに卒業される若い方々にとって、これらの人生の大先輩の存在はいかなる言葉にもまして励ましになると思いますが、私からもささやかな助言を述べさせていただきます。

ご家族の暖かい愛情、教職員の指導と配慮、友達との楽しい交わりの中で幸せに育ってこられた若いあなたがた、そして、今、希望に満ちて社会に羽ばたこうとしておられるあなたがたにとって、人生はばら色に輝いていることと思います。その希望に水をさすことはしたくありませんし、社会は苦労ばかりと悲観主義を唱えるつもりありません。ただ、現実の社会人の生活は学生時代ほど甘くはないこと、そして、人生では、喜びと悲しみとは表裏一体であることは知っておいてください。

そこで、現実には困難が起こった時の具体的な対応の仕方を三段階に分けて提案しましょう。

まず、第一の助言は、「いやなことは変えること」。男女平等といいながら、現実の社会では差別や女性蔑視の古い慣習が残っているところも多くあります。逆に、完全な平等主義が仕事と家庭の両立を困難にしているかもしれません。保育所はあっても条件が悪いかもしれません。女性だけの問題ではなく、環境汚染が進み、生活が破壊される危険があるかもしれません。そういう時にあなたはどうしますか。黙ってあきらめますか。誰かがやってくれるのを待ちますか。私は、是非そういう時には自分から、不都合なことを変える

ように声を上げ、周囲に働きかけていただきたいと思います。それが正しいことならば、仲間を集めて、少しずつでも状況を変えていくことができるでしょう。私たちの同志社女子大学はそのようなリーダーシップの取れる女性を育ててきたはずで。

第二の助言は、「逃げること」。これはいささか、ずるく卑怯に聞こえるかもしれませんが、自分の立ち向かわねばならない困難があまりにも大きくて、自分の力では変えられない時、自分の信念と相容れないものと無駄な争いをして潰されるよりも、その場を離れる方が賢明なこともあります。「君、死にたまうことなかれ」と与謝野晶子は歌って、軍国主義時代の人々の響盪をかいました。でも、今日の私たちは彼女の気持ちと勇気に共感します。社会の巨大な歯車の中で、個人の変革への力が余りにも無力な時、変えられなければ、逃げるのも一つの可能な選択だと思います。具体的には、進路変更、転職でしょうか。あなたは会社の歯車ではないのです。まず、あなたは一人の人間としての自分の生き方を大事にしてください。

第三の助言、そしてこれが最も厳しい困難に直面した時のことなのですが、「人間の品位を輝かせること」。個人がどのように努力しても、変えることも、逃げることもできない不条理な状況があるものです。戦争、震災、思いもかけぬ事件、事故、病気など、なぜ？ と問いたくなるような苦しみ、悲しみが人生にはあります。でも、このような時にこそ、人間の真価が問われる時です。五十三年目に卒業式に参加された方々は、皆、大変な苦労を見事に乗り越えてこられた経験をお持ちです。その中でもとくに苦労の多かった方、日本の統治下の韓国で国も言葉も自分の名前も奪われ、重なる戦争にもまれつつ生き抜いてこられた卒業生のある方は、「苦しみと悲しみをじつと見つめていると、それが宝石のように輝きます」と言われました。体験に裏打ちされたこうした言葉は計り知れない重みをもちます。苦労が大きいだけ、一層輝いている方は、私たちの周囲にも大勢おられます。

私も若い時に、生きることの無意味さに悩んでいた時に、フランスのノーベル賞作家アルベール・カミュの『シジフォスの神話』という作品を読んで、目の覚める思いをしたことがあります。ごくかいつまんでご紹介するとこんなふうです。ギリシャ神話の中で、シジフォスという名の王は、神々の怒りにふれ、高い山から転がり落ちてくる岩を運び上げねばならず、やっと上まで運び上げると、再び、岩が転がり落ちる、この繰り返しを永久に続けねばならない、という罰を受けています。意志と努力が虚しくなる、絶望的な刑罰です。カミュはこのような不条理な状況が人間の条件であることを認識した上で、なおかつ、困難に立ち向かう人間の姿勢そのものに、人間の品位と尊厳があり、シジフォスは幸福だとさえいえようと、述べています。変えられず、避けられない困難の中で、その機会にこそ、人間の品位を輝かせることができたら、人生は生きるに値するものと言えるでしょう。

新しい社会への希望に満ちた門出に贈るには、少し厳しい話になったかもしれませんが、まず、これからのあなたがたの生活が、何の苦勞もなく、明るく幸せなものでありますようにと願っています。でも、たとえ、苦しみや悲しみがあっても、なお、その中で、品位ある生き方を求めてください。そうすれば、喜びも悲しみも、共に輝かしい宝石になって、あなたの人生を美しく彩ることになるでしょう。

ご卒業、おめでとう。